

「間にある都市」の景観デザインへ

佐々木 葉

正会員 博士(工学) 早稲田大学理工学部社会環境工学科
(〒169-8555 東京都新宿区大久保3-4-1 E-mail:yoh@waseda.jp)

景観法の運用が本格的に始まり、全国各地である区域を定めての優れた景観形成が進んでいる。しかしその一方でいわゆるスプロール地域などでは、景観を論じる手がかりや主体を見出すことが困難な状態にある。こうした日本の状況を背景とし、本稿ではトマス・ジーバーツによる「間にある都市」という概念をとりあげ、その概念と地域計画・デザイン論としての特徴を読み解き、それを景観デザイン論として展開していくことを試みた。即ちグローバル化が進みライフスタイルが大きく変化した現代社会において、多くの人々の生活空間となっている都市でもなく田園や農村でもない「間にある都市」を積極的な計画対象として位置づけ、従来の計画・デザイン手法とは異なるアプローチを探るものである。

キーワード:「間にある都市」、郊外、田園、ポストモダン、景観デザイン手法

1. 輝く島を浮かべる暗黒の海

人口減少社会のコンパクトで美しいまち。現代の日本のまちづくりの課題を一言でいえば、そうなるのではないか。「コンパクト」という語には、エネルギー負荷が少なく、持続可能で、集約したまちでの賑わいや交流といったコミュニティのイメージまでもが託される。「美しい」という語には美しい国づくり政策大綱に始まり景観法の利活用による魅力的でブランドとしての発信力もある価値の高いまちへという期待がこめられ、さらにはそうしたまちの安寧や人々の公德心までもに願いは広がる。この2つの思いを、人口減少社会、すなわち右肩下がりという状況の下で如何に実現していくかは、誠に重要な課題である。

一方、昨年は「下流社会」という本がベストセラーとなった¹⁾。統計的な信頼度は計りかねるが、日常で見聞きする現象をうまい表現で分かりやすく描き出している。その中で、下流と呼ばれる総じて人生への意欲が少ない人々は、郊外に多いという指摘が気になった。都市計画においてはスプロールと呼ばれ、景観では目の敵にされるロードサイドの郊外レストランやコンビニを主な生活の舞台として暮している人々。そうした人々が今後増加するであろうと言われている。

景観法も本格的に活用が始まり、歴史的な街並ばかり

でなく、自然地や住宅地も含めて、極めて前向きに魅力的な景観の保全と創造への取り組みが各地で進んでいる²⁾。しかし、まちづくりに対して物理的な環境資源という側面からも、住民の意欲という面からも、到底手が見当たらないようなエリアが広く薄くこの国を覆っているような気がする。魅力的なまちという輝く島を浮かべる混沌とした暗黒の海のようなエリアについて、どう対処していけばよいのであろうか。

さらに、昨年の拙稿³⁾における問題意識であるポストモダン社会における景観の困難という課題は相変わらず私の中にある。価値観の多様化と空間的な布置の不安定さが増す社会において一定の面的広がりが必要とする景観は、どのように存在し得るのか。この話をある機会に荻原敬氏にしたところ、「それはまさにジーバーツの言っていることだから彼の本を読みなさい」と助言をいただいた。そうして不勉強にして知らなかったその著書「都市田園計画の展望―「間にある都市」の思想」⁴⁾に触れることとなった。

本稿では彼の主張についてレビューを行い、「間にある都市」と呼ばれる地域と時代を景観デザインの対象として位置づけることの意義を考えた上で、具体的にどのような方法がありえるのかについてその極初歩のイメージを描くことを試みる。

2. 「間にある都市」の概念とそれへのスタンス

「都市田園計画の展望—「間にある都市」の思想」の著者トマス・ジーバーツはドイツの都市計画家である。この著書は1995-96年に書かれ、2回の補注的あとがきを加えて2000年に第3版が出されている。この本の趣旨は前書きに監訳者によって簡潔に要約されているため、以下に引用する。

「都市は、文明と文化の中心にあって、その伝播のために格別な位置を占めながら歴史的に形成されてきた中枢（センター）だった。その周辺にある副次的な中小の都市のネットワーク、都市と都市の間を埋めている、都市とはまったく別の空間的、社会的特性を持っている田園地域が、中心都市を巡って、ある階層性をもって分布しているという空間イメージで、私たちの広域生活圏の空間構造を認識してきた。そのイメージの下に、都市計画、広域計画が組み立てられている。グローバリゼーションと交通、通信技術の革新により、今や、産業構造もライフスタイルも大きく変化し、このような古典的な社会像、空間像に基づく空間構造の認識の枠組みでは、現代の広域生活圏を捉えきれなくなっている。したがって、その質を高めることもできなくなっている。今までとは全く違った広域空間イメージ、Zwischenstat（間にある都市）という概念により、この新しい事態に対応し、空間デザインに焦点をあてることによって、新しい広域計画、地区の計画の可能性を引き出すことが、本書の目的である」（p. 6）

「間にある都市」とはなんともこなれない言葉であるが、その指し示そうとする対象が極めて見えづらく、そのようにしか呼び様がない、ということが対象の特質をあらわしているといえよう。その定義は以下のようになされる。

「昔からある諸都市の中心と広々とした田舎の地域の間にある、生活空間の場と、場を形成しない流動中の空間の間にある、小規模な地域経済循環と世界市場に従属した循環の間にある、「間（あいだ）にある都市」（p. 6）

こうした対象を積極的に論じる理由として、中心から同心円状に広がっていく領域の段階構成という空間イメージはもはや成り立たない、ということをジーバーツは繰り返し主張する。これはまさにヨーロッパの都市のモデルであり、日本においては当てはまらないともいえる。しかし空間的なモデルの相違を超えて、彼の主張に耳を傾けるべきと私が考えた理由は以下にある。ジーバーツが都市を論じる際に避けて通れない前提条件として、以下の3点を挙げていることだ。

1. 「経済における世界的な労働力の分布及び世界経済の中で、都市の位置の意味の変化。」
2. 「都市が持っている文化的な結束力の溶解及びそ

れと関連する都市文化のラディカルな多元化。」

3. 「自然的な世界は今やほとんど完全に人工物によって侵食されていること、したがって都市と自然の対照性が解消してしまったという事実。」（p. 8）

すなわちポストモダン社会の特質を前提としている、という点である。ジーバーツは、こうしたゆるぎない現実を前にして、古典的でノスタルジックな中心性を持った都市像を是とし、スプロールは悪であり何らかの方法で整序しなければならないというスタンスに立った計画論はまるで実効性がないという。あたかも「コンパクトで美しいまち」というのは幻想だと言われているようだ。私にはそこまでは言い切れない。というのも、やはりドイツと日本ではそのスプロールの程度と内容に相当の違いがあるため、日本においては一定程度の整序が必要であると思うためである。しかし同時に、その必要性はいたるところで主張されながらも⁵⁾、一向に実態がそうならない現実を直視するならば、ジーバーツの問題提起は貴重だ。

さらに彼は言う。

「拡散している都市は「計画的でない」という印象を与えるが、それは、個別の、それぞれが自ら合理的と判断してなされた数多くの行動から生じたものなのである。」（p. 17）

つまり、現状は悪意によって作られたものではなく、あるひとつの必然であるとする。これは言い換えれば、現代の「なる風景」だということもできる。もちろんそれをそのまま受け入れるという意味ではなく、その問題を改善するためにこの本は書かれている。

もう一点、彼の主張が重要であると考え理由は、古典的な都市イメージにかなった中心市街地の問題と「間にある都市」のあり方とは連動している、というスタンスに立っているところにある。彼の著書では特に中心市街地の問題に焦点をあててはいないが、伝統的な街並が残るエリアの現状に対しても疑問を呈している。

「擬似歴史的建造物を付け足したり、都市機能の象徴と思われる小売商業機能を無理に振興しようとしたりして、古い都市を、死ぬまで愛したりするべきではない。」（p. 34）

社会が大きく変化したなかで、人々の求めるライフスタイルおよび都会性の質的变化を冷静に考えようという。

「私的で個人的な移動性向、雇用や分業の分布の拡散、自然環境に近く接し、自分だけの空間を広く持ちたいという要求が強いこと」（p. 33）

これがある限り、「間にある都市」は人々の主要な生活空間となる。とはいえ、ジーバーツは中心市街地が不要というのではなく、それが健全なる再生を果し持続していくためにも「間にある都市」の計画が必要であり、つまりは両者に対するまなざしの転換が必要であると主張

している。

以上のジーバーツの基本的スタンスは、ドイツと日本との空間実態の違いを超えて、ポストモダン社会の計画論、さらには景観論として参照に値すると考える。実際問題として、日本に残された伝統的な街並や美しい田園風景は、確かに風景の規範と位置づけるにふさわしいスタイルを持っているが、それを支えるシステムがそれが生まれた時とは大きく異なっている社会状況において、それらを保全しさらには敷衍する現実的な手法はいったいどこに求められるのだろうか。10年ほど関わってきた岐阜県の郡上八幡のまちづくりにおいても、中心部の街並保全として必要と思われる手法はほぼ整えられてきたが、それでも古い家を取り壊され、水利利用施設は減っていく。そうした中心部が現代において新たな価値をもって再生されるには、その外周部の、またその一回り外の空間の、そしてさらには高速交通ネットワークによって到達可能な様々なエリアの適切な計画と一体的に取り組むことが必要であると実感している。しかし、私もまたこれまで、伝統的なまちの魅力に取り付かれ、その中だけを見てきたのであった。自然地や農地を侵食して建設された住宅や商業・生産施設、病院などの福祉施設の存在なしに中心部は生き残ることはできないにも関わらず、これらの地域に対しては、そのヴィジョンを見据えた景観像を描くこと無しに、侵食する要素への不満だけを口にし、せいぜい色を押さえてくださいという程度の方向付けしかしていなかったのではないか。あるいは美しい農村や田園風景は、そこだけを眺めて近代的な要素の排除を求め、ボランティアな都市住民のバックアップに生き残りの糧を求めてきたのではないか。もちろん、先述したように都市と農村の適切な関係を保つための様々な計画の試みと蓄積はある。しかし少なくとも景観論としては、こうした「間にある都市」に対しての前向きなアプローチは極めて少なかったように思う。日本の人口約1億2千7百万人中、市街化区域に住んでいるのは約8千5百万人⁶⁾、ちょうど3分の2である。残りの3分の1は市街化調整区域や都市計画区域外に居住し、そのすべてが農村や田園の暮らしをしているわけではない。

したがって、ジーバーツの主張を景観デザイン論の観点から参照し、また解釈することには次のような意味があると考え。まず1点は、景観法などによって保全および創造されようとしている魅力的なまちである輝く島が、暗黒の海に引きずりこまれそうになるのに必死に抗いながら存在するのではなく、淡々と安定して存在し、なおかつそれを取り巻く海自体が、海底地形図を見るようにある構造を持ち、海に暮すものにとっても魅力と満足を与える場所を内包したエリアとして存在する、という関係性を築いていくために必要なアプローチとして意

義がある。これは現存する美しい景観を健全に保全し、惨憺たるエリアの景観の問題を改善する、という極めて現実的な意義ともいえる。そして2点目は、極めて広域にまたネットワーク的に存在する「間にある都市」の景観を正面から考えることで、景観という概念および景観デザインの手法の再定義がなされる可能性があるということがある。これは、個人的な興味の問題かもしれないが、景観とは何か、それはどのようにデザインされるのか、という永遠の問いへの絶え間ないチャレンジとして、学術的に意味があると考えている。

3. 「間にある都市」の計画とデザイン

前章でジーバーツの主張に耳を傾ける意義を確認した。では次に、彼の「間にある都市」の計画へのアプローチ（彼はそれを都市デザインと呼んでいる）について、それを景観デザインへとつなげていくことを考えながら、読み解いていく。

「間にある都市」とは何かについて、ジーバーツは物理的な空間特性だけでなく、人々の日常生活や政治的、文化的側面からその特質を多角的に描き出している。そして都市を経済性や機能性の観点から論じるのではなく、文化と環境の観点から論じるべきだと言う。それこそが結果として経済的に有利となるためである。こうしたスタンスを明確にした上で、計画論として取り組むべき方向性が随所に抽象的ではあるがちりばめられている。例えば、以下の記述がある。

「この侵食されきった風景を読み解くためには、方向性を与え、将来イメージの素描を作り出すことが必要である。それによって、地域計画に関する新たな理解を深めることが容易になるだろう。」(p. 79)

「イメージだけで達成できることはごくわずかである。小さくても実物のデザインに介入すること、環境に意味を与える創造的な過程を作り出すことが、広域都市圏を、より「読み解きやすくする」ための必須の条件である。」(p. 147)

ジーバーツによる「間にある都市」の計画へのアプローチは、非常に大きくまとめてしまえば、2点になると考える。その第1は、まず、「間にある都市」という非常にとらえどころがない対象に対して、その構造や特性を把握できるイメージを作り上げることである。第2点は、多種多様な大小の事業を継続的に行っていくことであり、それらの第1点であげたイメージとの関係性を明示的にすることである。なお、行政のシステムについての議論もあるが本稿では触れない。上記の2点について、もう少し詳しく見よう。

ヴィジョンとしての広域都市圏のイメージ

ジーバーツは繰り返しイメージの重要性を説く。そしてそのイメージは、物理的な特徴の集約に基づいて描かれるというよりは、人々の認識、希望であり、ヴィジョンとして創造的に構築されるものである。それは、コンピュータなども効果的に利用して、視覚的にわかりやすいダイアグラムなどの図像として表現されるものである。同時に、イメージの有用性と重要性を強く主張する一方で、イメージは乱用や失策の危険を伴うことも指摘している。

「上滑りな宣伝的イメージや洗脳を目的とするイメージに流れやすい。」(p. 112)

という問題である。これに対しては、そのイメージをいくつかの観点から評価するべきだとしている。その観点とは、まず、経済性や機能性よりも文化と自然環境を目的としているか、また「間にある都市」の意義を考える上で必要な7つの命題に照らして妥当かどうか、である。その7つの命題は第2章3節において述べられているが、その趣旨を私は以下のように解釈した。①分業が効果的に行われるための均質で連続的な生活地域となっているか、②フレキシブルなライフスタイルを許容しているか、③アイデンティティを強め、生活の支援があるリアリティのある「場」を内包するか、④環境問題への取り組みを促すために必要な地域の関係性が理解可能か、⑤格差による都市の断片化が回避されているか、⑥外部のみならず内部においても良好な交通ネットワークによるアクセスが確保されているか、⑦共に帰属する感覚が生まれるような推進策が盛込まれているか、である。

このうち、①、③、④、⑥は、土地利用、環境およびインフラ整備、空間デザインといった、物理的な整備事業と関係しており、景観計画と直接的に結びつく。それ以外の②、⑤、⑦は多分にソフトの施策、つまり教育や福祉制度、文化活動支援などに期待されるものといえよう。しかし、言うまでもなく景観はそれを体験する主体の意識に大きく依存するため、これらソフトのプログラムと一体化した景観イメージの醸成が必要となる。

ついで、イメージの主体についてもジーバーツは言及している。イメージは共有されるものではあるが、基本は個人個人によって解釈されるものであり、押し付けられるものではない。しかし元来描きにくいイメージを自らが構築することには困難が伴う。この点について、彼はフランスの社会学者であるアラン・トゥレーヌの以下の指摘をまず引用する。

「私は、経済という公共的な世界と、分断され、閉鎖性が強い文化的なアイデンティティの世界とのつながりは、個人生活の体験のレベルでしか成立しないのだということを明快に語るべきだと信じている。私が言いたいのは、誰であろうと、貴方も私も、偉大な技術者だろうと失業

中の労働者だろうと、一人ひとりの個人が、技術や市場の世界の中に生きると同時に、遺産、記憶、言語、非常に特定性がある文化と共に生きていかなければならないということだ。」(p. 82)

その上で、ジーバーツは以下のように自身の見解を述べる。

「しかし、これは個人に対して過度な責任を負わせることにはならないだろうか？ 私たち個人を支援する、他の「介在する」組織は必要ではないのだろうか？」(p. 83)

主体に関わるこの問題は、社会学で指摘される「弱い」市民（または個人）と「強い」市民（または個人）の議論に通じるだろう。現代のように非常に関係性が見えづらく自己の位置づけが複層的にならざるを得ない時代において、「他者との交わりを通して調停や妥協、あるいは和解のための能力を高めていく諸個人」⁷⁾が必要とされているが、そうしたプロセスを経て地域のガバナンスに参加し、自己実現をしていくことが可能な個人に強い期待が集まる一方、そのようなことができない個人の層の存在をどうするか、という課題である。冒頭に「下流社会」を引いたが、必ずしもその区分と対応するわけではない。しかし、市民参加やNPOの力にまっすぐりを委ねる一方で、その限界を認識せざるを得ない現状もある。そうした現状のなかで、どのようなイメージであれば、より多くの個人に受容され、さらに共有されていくのかを考えなければならない。先の7つの命題のなかのソフトなプログラムは、こうした観点からも適切な方策を検討せねばならないだろう。

個別の場所のデザインとその位置づけ

2点目に移ろう。イメージは重要だがもちろんそれだけで実際の空間が変わり、「間にある都市」の生活の質が高まるわけではない。個別具体的な場所への介入が必要である。それに対しては、一つには現代アートの力を借りることが示されている。ジーバーツは伝統的な美学だけに頼ることを否定しているが、ベンチューリの「ラスベガス」⁸⁾のような見方には懐疑的である。あくまで両者のバランスを取らねばならないという指摘もしている。既成概念にとらわれず魅力の発見を創造的に試みよ、ということだと解釈しよう。また「間にある都市」のイメージを明確にして具体的な場所のデザインをおこなった成功例として、エムシャーパークが紹介されており、そのプロセスにおいても現代芸術の力を高く評価している。こうしたアーティストによる場所のイメージの創造や再生は、ハイデンの「場所の力」⁹⁾でもとりあげられおり、日本では「大地の芸術祭」¹⁰⁾によってすでに大きな実績を挙げていることから、いまや一つの重要な手法といえよう。

サイトスペシフィックな芸術作品を通しての場所の体

験は、単に視覚だけでなく五感を動員するものが多い。ジーバーツは以下のように指摘する。

「知覚は、より多くの感覚が関係すればするほど、より濃密に、持続的になる。したがって、視覚や歴史の感覚に加えて、触覚による経験や典型的な音や匂いが登場し、さまざまな形で空間を構成し、記号化すると、明らかに「間にある都市」の読みやすさが増す。」(p. 143)

「間にある都市」の領域には、構図的に特徴があるところは多くない。連続した家並やアイストップとなる秀峰に恵まれた場所は例外的である。それらの場所を記憶に残るものとするには、上記の主張のように、視覚以外の感覚に注目した方向付けが重要となる。

さて、以上のような触媒的要素や方向付けをへて記憶に残るようになった個々の場所と全体のイメージとの関係性の操作について、ジーバーツは明確に語っていないが、具体的な場所のデザインという行為のあり様については、第3版のあとがきで繰り返し述べている。その主旨を大胆に意識するならば、現代の複雑なシステムのもとでは将来は基本的に予測不可能であるため、個々の開発は、固定的な全体イメージ上のある役割を担うものではなく、開放的でフレキシブルなものである。その前提のもとで、「フレームワーク、コア、ノードに形を与えていくデザイン」(p. 212)としてデザインは挑戦的に行われ、その主旨は「形はフィクションに従う (form follows fiction)」(p. 214)と表現できる、という。感覚的には理解できるが、すぐに腑にはおちない。その実践であるとされるエムシャーパークの詳細なトレースなどが、今後彼の主張を理解するためには必要とされるが、現時点では、全体イメージがマスタープランのように明確にあって、その部分をそれぞれの場所が担う、という固定的あるいは予定調和的な見方では「間にある都市」のデザインはできない、ということを確認しておこう。

4. 「間にある都市」の景観デザイン手法

以上、ジーバーツの著書を繰り返し、行きつ戻り読み込みながら、私の日々の問題意識と、現在取り組もうとしている郡上市全域の都市モデルの構築といった課題を



図-1 養老電鉄沿線名所図絵 (1928) 全体 文献11) p. 30

浮かべつつ、では一体、具体的にどのように「間にある都市」の景観を目標像として描き、編集していけばよいのかについて、相当な飛躍をもった直感的アイディアのレベルとして、強引にそのデザイン手法を案出してみた。それは、対極的なメディアと感覚を併用したダイナミックなデザイン手法である。

広域的都市圏イメージのデザイン

まず広域イメージについては、極端にデフォルメされた図絵と冷徹な衛星画像を併用して、対象地域を理解し、読み解きながら、その目標像を構築していく。図絵には吉田初三郎のパノラマ地図を手本とし、衛星画像には、Google Earth を使おう。

吉田初三郎 (1884-1955) は、日本中の名所の鳥瞰図を独特な手法で描き、大正の広重と呼ばれた人物である。大正から昭和初期の観光ブームのなかで各地の観光紹介用のパノラマ図絵を描き、人気を博した。実際に見えなくともイメージ的につながっているエリアは画面に取り込まれ、山、川、海、市街地という地形の状態をベースにし、その中に地名が札のように書き込まれ、注目したい名所は大きく誇張され、鉄道や道路、航路などの交通ネットワークは容易にたどりやすく、小さくちりばめられた点景が場所場所にリアリティを与えている。初三郎自身の言葉によるとその特徴は以下のようなものである。

「私の考えでは、名所図絵の生命は飽くまで自然を巧みに捕らえて、自家菜園中のものとなし、一目してその美しさ山容水態を髣髴せしむところにあり、幾何学的な測量図や平面図は、専門的以外に其の真価の甚だ少ないのを言明してはばからないものである。即ち万人が見て楽しみながら解り得べきもの、これが即ち私の作品の生命とする所であり (以下略)」。『私の作品の作り出さんとする名所図絵は単なる一枚のスケッチではなく、幾十枚幾百枚のスケッチが集まって其処に一個の鳥瞰的図絵を構成せんとするのである。即ち部分々々に就いては飽くまで忠実な自然描写であるが、一度これを総合する時に於いて、きわめて人為的となり、初三郎式となる』。¹¹⁾



図-2 図-1の部分

これらの言葉は、「間にある都市」の広域的イメージの表現として求められる要件の多くを見事に満たしている。吉阪隆正による魚眼マップも地域のヴィジョンとしてのイメージを描く手法として用いられているが、「間にある都市」のように広域に広がり、かつその空間構造が多中心的であるものには適さない¹²⁾。やはり初三郎の手法が手本にふさわしい。この手法に則り、エコロジカルな関連性を読み取りやすくする表現の工夫として水系や森林・緑地のネットワーク性の表現などを深め、点景を現代的な要素にしていけば、より目的に沿うものとなろう。

これに対して、Google Earth は、ほぼ全世界の衛星写真画像を手にとるように見ることができるソフトウェアである。衛星写真は元来軍事的で開発されていることからわかるように、きわめて冷徹に対象地の情報を描き出す。初三郎のきわめて主観的な世界観とは対極的である。初三郎の図絵では描きたくないものは描かれない。しかし、「間にある都市」のデザインを考えていくには、認識されないものの実態をも理解する必要がある。特にエコロジカルな観点からのヴィジョンを描くには、地形構造や自然地と開発地との面積比などを客観的かつ直感的に理解することが議論の前提として必要である。例えば、アイレベルで眺めているゴルフ場の緑豊かな自然的な景観が、航空写真ではきわめて人工的な開発地として見えるという認識のギャップは、「間にある都市」を考えていくうえで意味ある刺激となるであろう。こうした情報の入手が誰でも手軽にできるツールであると同時に、Google Earth で様々な場所を見ていくその見方が、現代の「間にある都市」での生活スタイルを意識させることに通じる。世界のなかから何らかの理由または偶然によってある場所をマークし、そこにぐうっとズームインしていく。その周辺をあてどなくさまよう。そしてまたはるか別の場所へとジャンプしていく。こうした世界認識は、例えば自分の住むまちから世界が同心円的に広がっているという空間認識とは全く異なる。世界をザッピングすることによってイメージを構築していくスタ

イルを象徴的に意識させるであろう。その一方で、ズームインまたズームアウトしている課程では、逆説的にそのポイントは世界の一部であり周辺とつながっているのだ、という感覚を与えるだろう。それは「間にある都市」での生活と行動の特色を自覚させ、計画への動機付けに少なからず資すると考える。

以上の二つの対極的な表現媒体を用いて「間にある都市」の景観を描き出すことによって、従来の手法を越える展開が可能となるのではないだろうか。従来の手法とは、地図上に景観資源のポイントをプロットしたり、ゾーニングしたり、また個別の場所の写真を並べるという手法、さらにはマグハークによる「デザイン・ウィズ・ネイチャー」¹³⁾のように各種の地図のオーバーレイで描く手法である。これらに欠けている高度な編集可能性とダイナミック性、ヴィジュアルなインパクトをパノラマ図絵と衛星画像は持っている。

場所の景観デザイン

広域的イメージを描く二つの手法がいずれも視覚に特化したものであったのに対して、場所の景観デザインにおいては、図像性や構図の魅力よりも、五感によって体験されるもの、かつ、時間によって変動するうつろ要素に注目したデザインを行う。具体的には季節や気象、動植物によって特徴付けられる景観の意識化とデザイン、および祭の活用である。

「間にある都市」の多くの場所はそのままの眺めとして、つまり写真に撮影した場合、他とはっきり差別化される特徴を持つ場所は少ない。それに対して、集落の建物のデザインをそろえたり道路のデザインを洗練させることで景観の向上を図ることができればそれに越したことはないが、全域をそうした手法でカバーするのは厳しい。そこでそれぞれの場所での時間的に変化する多様な体験の記憶を印象付けることを考える。夕焼け、霧、新緑、渡り鳥、蛍、虫の音、水音、潮の干満、松林、などである。これらは、都市的土地利用が広がっている「間にある都市」でもまだ多くを体験することができる。もちろん市街地においても夕焼けなどは充分見られる。そうした自然の現象に促されてその空間に足を運び、場所を認識し、その周辺の空間を景観として眺める機会を設定する。あるいはまたそれぞれの場所がまた別の場所から見えることを確認する。それぞれの具体的な内容に照らして何らかのストーリー性のある名づけとシリーズ化を行うことで、これといった景観資源のない場所の景観をデザインすることを試みる。これはエコロジカルな感覚と重なる点が多いため、現代においては多様な人々の関心を獲得する可能性が高い。

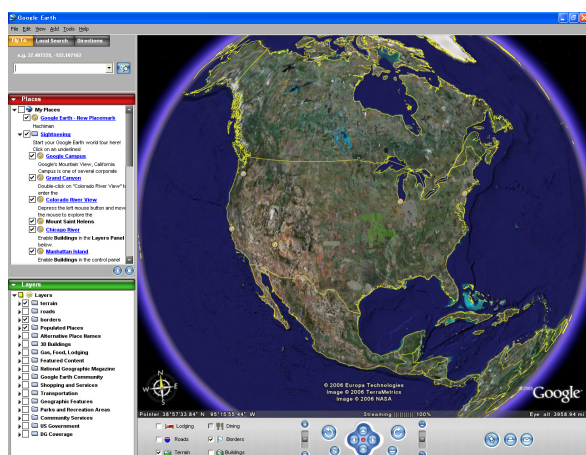


図 - 3 Google Earth のフロントページ

ついで祭である。視覚的演出、音、食、運動といった全感覚を動員して体験されるのが祭である。また多くの祭りはその発生に防災や環境と連動した信仰に根付いている。そのオリジンの意味を再確認しながら、祭からみた場所と人々のかかわりを意識化させる。核都市から外周に広がっていったエリアに対しては、中心部で行われる祭に参加することで日常的にはほぼ無関係となっている中心市街地との関係性を保ち、かつての機能的中心としてはもはや存在しない中心市街地に、象徴的な中心としての位置づけを与えることができる。また祭は地域内消費が活発となる行為でもある。祭は観光化によって様々な変質を受けているところもあるが、「間にある都市」の地域イメージとの関係性という観点から、祭の場所のデザインを検討することは一つの手がかりとなろう。

以上のきわめて思い付き的なアプローチは、従来の景観デザインの枠を超えているかもしれない。しかし、人々による環境の認識の絵姿を創造していく行為であり、その意味において、景観デザインと呼べるのではないかと考える。逆に言えば、眺めの視覚像の分析と操作という狭い概念で景観デザインを捕らえている限り、「間にある都市」に正面から取り組むことができないのではないかと考えている。本稿での誠に不完全な試みを、今後具体的なエリアでの検討を通じてつめて行きたい。

謝辞：本論考のきっかけを提供された蓑原敬氏に感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 三浦展：下流社会—新たな階層集団の出現，光文社新書，2005
- 2) たとえば雑誌「季刊まちづくり」No.12，2006.9 の特集では景観法への取り組みの実態が集約的にまとめられている。
- 3) 佐々木葉：現代の景観の目的と処方，景観・デザイン研究講演集No.1，pp.276-281，土木学会，2005
- 4) トマス・ジーバーツ著，蓑原敬監訳：都市田園計画の展望「間にある都市」の思想，学芸出版社，2006
- 5) たとえば，NPO 法人日本都市計画家協会編著：都市・農村の新しい土地利用戦略，学芸出版社，2003，あるいは，土田旭+都市景観研究会編著：日本の街を美しくする，学芸出版会，2005 第6章など
- 6) 都市計画協会：都市計画年報2005，2005
- 7) 吉原直樹：都市とモダニティの理論，pp.112-115，東京大学出版会，2002
- 8) ロバート・ベンチューリ他：ラスベガス，鹿島出版会，1978
- 9) ドロレス・ハイデン：場所のカーパブリック・ヒストリーとしての都市景観，学芸出版社，2002
- 10) 第1回の記録として，越後妻有大地の芸術祭実行委員会編集発行：大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ2000，がある。2006年には7月23日から9月20日まで，第3回目が開催された。
- 11) 別冊太陽，吉田初三郎のパノラマ地図，p.119，平凡社，2002
- 12) たとえば，佐藤滋他：図説都市デザインの進め方，丸善，2006 においても魚眼マップの他多様な地域イメージを表現する図像が紹介されており参考となるが，「間にある都市」のイメージ表現に適した画法として顕著なものは見られない。
- 13) イアン・マグハーグ：デザイン・ウィズ・ネイチャー，集文社，1994